

し、十年四月越前鯖江にて新地三萬石を賜はる。寶永二年九月入りて紀州宗家を嗣ぎ、從三位左中將となる。三年十二月參議、四年十二月權中納言に任ず。六年五月將軍家繼の後を繼ぎ二の丸に移る。享保元年八月征夷大將軍宣下、正三位權大納言となり、右大將を兼ねまた内大臣に移る。延享二年職を嫡子家重に譲りて西丸に老し、寶曆元年六月薨す。年六十八。【四五、五八、六八、一〇五】

徳川頼房
戸田伊豆守

天保改革篇掲出。【四六】
名は氏榮、寛十郎と稱す。天保十四年七月目付となり、九月駿府町奉行に移る。弘化四年正月日光奉行に轉じ、同二月浦賀奉行となる。嘉永五年九月勘定奉行六席となり、七年六月西丸留守居となる。安政四年二月

戸田銀次郎

大阪町奉行に移り、同五年八月死。【一〇、一二、一三、一九】
名は忠徹、蓬軒と號す。後藩主より忠太夫の名を賜はる。水戸藩世臣忠之子。文政中齊昭擁立に功あり。遂に側用人より執政に進む。齊昭の施政を輔けて功頗る多し。弘化元年齊昭幕議を受くるの時また罪を得しが、後免されて藤田彪と共に齊昭に常侍輔翼し、屢々福機に執掌して最も力を效せり。安政二年十月江戸小石川邸にあり、震災に罹りて死す。年五十二。明治二十四年四月正四位を贈らる。【六一、六二、六四、七四、七七、八〇】

戸田忠温
戸田山城守
遠山左衛門尉

幕府實力失墜時代掲出。【五九】
忠温に同じ。【七四】
天保改革篇、幕府實力失墜時代掲

登美の宮
友部正介
鳥居耀藏
鳥居忠耀

出。【九六】
天保改革篇掲出。【五九】
天保改革篇掲出。【六一】
忠耀に同じ。天保改革篇、幕府實力失墜時代掲出。【二七、二八】
天保改革篇、幕府實力失墜時代掲出。【六六】

【十行】

ナ

内藤藤一郎

水戸藩臣なり。慶篤に仕へて若年寄となり、嘉永四年四月大番頭に轉ぜしめらる。【七七、七九、八〇】

中井竹山

松平定信時代、幕府實力失墜時代掲出。【五】

永井主水正

通稱岩之丞、名は尙志、玄蕃頭と稱し、介堂と號す。文化十三年十一月三河國奥藏邑に生る。二十五歳の時

幕府麾下の士永井能登守の養子となる。弘化四年春軍學藝術を以て部屋住より番士となり、年俸三百匁を受く。嘉永六年八月徒士頭となる。十月目付に轉じ、海防鑄砲等の事を司る。後長崎海軍傳習の事を管理す。安政四年三月東歸し江戸築地に操練所を開く。十二月勘定奉行に轉じ、海軍事務を擔任す。五年七月外國奉行となる。六年軍艦奉行となる。八月讒を得て免職登居す。文久二年再起軍艦役頭取、京都町奉行となる。ついで大目付となる。戊辰の際箱館に渡る。翌年獄に入れられ、五年正月赦さる。ついで開拓使御用掛となり左院少議官を經、八年元老院權大書記官となる。九年十月免職、二十四年七月死。年七十六。【九六】

中沼了三

名は之舜、字は魯仲。葵園と號す。隱岐中村の人、醫師養碩の子。やゝ長じて兄秋水に従ひ京都に出で鈴木恕平の門に學ぶ。後帷を垂れ諸生を教ゆ。弘化中學習院の教職に補せらる。安政文久の間公卿士庶に交り大義名分を唱ふ。十津川の件に關し疑を受け遂に十津川に遁る。明治維新の後京都に還る。ついで參與となり西郷隆盛に屬し、和歌山、高松等の受城使となる。戊辰三月軍職を解く。後彰仁親王に侍講し天泉の經筵に召され大學を講ず。已にして事を以て讒を受け明治九年五月京都の獄に下され數月にして赦さる、爾來教授な事とす。程なく復位年金を賜はる。二十九年五月死。年六十七。大正四年正五位を贈らる。【五】

中山權典侍局 中山慶子に同じ。【一〇三】

權大納言忠頼の二子。文化六年十一月京都藥師寺門内の邸に生れ、文政八年家を繼ぐ。時に正四位下權中將兼皇太后宮權亮たり。其より諸官に歴任し、弘化四年權大納言となる。慶應三年十二月議定となる。明治元年二月輔弼を仰付られついで従一位に叙し准大臣に任ず。二年議定を免じ神祇伯に任ず。ついで勳勞祿千五百石を下賜せらる。また宣教長官に兼任す。四年六月本官及兼官を免じ終身現米五百石を下賜さる。同時に麴香間祇候を命ぜらる。十七年特旨を以て侯爵を授けられ、二十一年五月大勳位に叙す。六月薨す。年八十。東京豊島岡墓地に葬る。【一〇二、一〇三、一〇四】

中山慶子

従一位局と申す。中山忠能の第二女。天保六年十一月京都石藥師の舊邸に生る。嘉永四年三月典侍御雇を命ぜられ名を安榮と賜ふ。四月典侍に補し今參と稱す。ついで權典侍となる。五年九月皇子御誕生、以來御養育掛として自邸にありて御養育の任に當る。安政六年七月所勞に依り典侍を辭し新宰相と稱す。慶應四年八月従三位に叙し三位局と稱し大典侍仰付らる。明治三年八月東京に參り九月従二位となる。十二年七月明宮御養育御用仰付られ、廿二年三月願により之を免じ、三月特に正二位に陞せらる。三十三年一月大患に罹り特旨を以て従一位に叙せらる。四十年十月病を以て東京青山に逝く。年七十。【一〇一、一〇二】

鍋島齊正 幕府實力失墜時代掲出。【二八、九六】
ナポレオン・ボナパルト ナポレオンに同じ。
幕府分解接近時代、幕府實力失墜時代掲出。【二四】
南部信順 島津重豪の男。出でて陸奥八戸藩主信眞の嗣となる。遠江守と稱す。【八九、九三】

二條昭實 二條家第十三世の主、關白左大臣時良の子。元和元年家康と議して禁中條目十七條及び武家法度十三條を定む。五年七月薨す。後中院と號す。【三】

仁孝天皇 文政天保時代、幕府實力失墜時代掲出。【一、六、一〇三】

野宮定功 定祥の子。明治二年七月皇后宮大夫に任じ、八月山陵御用掛り仰付らる。

野宮中將

三年十二月本官を免ぜらる。【六】
定功に同じ。【七】

【八行】

羽倉外記
長谷信篤

天保改革篤揚出。【二八】
信好の嗣。文政元年二月生る。慶應三年十二月參與より議定となり刑法律事務總督を兼ね。四年三月大津裁判所總督となる。開四月京都府知事に任ず。明治三年三月事により謹慎を命ぜられ、ついで免さる。同年十二月華族觸頭を命ぜらる。五年十一月京都府知事に任ず。八年七月議官に任ず。十年一月依願本官を免じ、位一級を進められ爵香間祇候となる。【六】
一橋慶昌に同じ。【七二】
水戸家老女。權中納言橋本實誠の女。

初之丞
花の井

林道春

姉小路局の妹。【五一、五七】
松平定信時代揚出。【五】

東園基敬

基貞の嗣。明治元年正月參與に任ぜられ、開四月權辦事となる。五月權辦事を免ぜられ、九月學校御用掛となる、ついで從三位に叙せらる。十一月權辦事再任、二年四月内辦事に移る。七月宮内權大丞に任ず。三年十二月宮内大丞兼皇太后宮亮に任ず。四年六月留守判官を兼ね。同年八月本官并に兼官を免ぜらる。【六】
松平定信時代、雄藩篤、文政天保時代揚出。【五八】
徳川慶喜に同じ。天保改革篤揚出。【七二、七三、七五】
家慶の子。母は阿定の方。文政八年三月江戸城西丸に於て生る。後出で

一橋治濟

一橋慶喜

一橋慶昌

一橋昌丸

尾張大納言齊莊の次子。弘化四年五月一橋慶壽の後に繼ぎ、同年七月十六日死す。翌月廿日喪を發す。【六〇】
寶曆明和篤、松平定信時代、幕府分解放近時代揚出。【五八】

一橋宗尹

藤田幽谷
藤田東湖

幕府分解放近時代、雄藩篤、天保改革篤、幕府實力失墜時代揚出。【六四】
名は彪、字は斌卿、通稱は虎之輔、後誠之進と改む。常陸水戸藩士。幽谷の子。弱冠の時讀書を好まず、専ら武術を習ひしが、一朝感ずる所ありて刻苦書を讀み學業大に進む。人となり豪邁にして慷慨の氣象に富む。初め藩主齊修に仕へ、また齊昭の知

近世日本國民史 人物概覽

峰壽院

水戸齊修夫人、徳川齊第十三子、第八女、母は操院於登勢の方。寛

北條氏綱

政十二年四月生る。峰姫と稱す。享和三年六月徳川鶴千代と縁組。鶴千代は即ち齊修なり。文化二年四月入興。九年十一月鐵業始、十一年十一月婚姻。十二年十月實名を美子と改む。文政十二年十一月齊修の死により峰壽院と號す。【六〇、七六、七八】
幼字千代丸。通稱新九郎。長氏の長子なり。大永四年四月上杉朝興の江戸城を陥れ、ついで里見義弘と鎌倉に戦ひ之を破る。天文二年後奈良天皇御即位の料足五萬疋を献じ功により従五位下左京大夫に任ぜらる。六年秋上杉朝定と河越に戦ひ河越松山二城を取り、七年十月足利義明、里見義堯の連合軍を下總國府臺に破り大に兵威を輝かす。十年七月死。相模國箱根早雲寺に葬る。【二三】

保科正之

松平定信時代、幕府分解接近時代掲出。【一〇五】

ボナバルテ

ナポレオンに同じ。幕府分解接近時代、幕府實力失墜時代掲出。【二六】

堀織部正

名は利照。嘉永六年五月目付となり、七年八月箱館奉行に移る。安政五年七月外國奉行をかぬ。六年六月神奈川奉行を兼ね。萬延元年十一月死。【九六】

堀大和守

天保改革黨、幕府分解接近時代掲出。【六四】

本郷丹後守

泰固に同じ。【六二】

本郷泰固

將軍家慶家定に仕へ近侍となる。安政四年八月側用取次より若年寄に移り、勝手掛りとなり、三千石加増せらる。五年七月事により職を免ぜられ、菊の間縁類詰を命ぜらる。人其故を知るものなし。【六八】

本壽院

名はお美津。御書院番頭諏訪備前守組跡部惣左衛門源正寧の女。文政五年江戸城西丸御次となり家慶に次す。同六年御中臈となる。七年四月八日家定を生む。九年二月九日春之丞を生む。同十一年三月老女上座となる。【六二】

本多忠徳

越中守と稱す。天保十二年七月奏者番より西丸若年寄となり、同十四年十二月若年寄勝手并海防掛りとなる。重厚寡言、首として江川太郎左衛門に就きて西洋火術を究め、又文學を好み品行方正君子の風ありしが、萬延元年六月死。【七五】

【マ行】

マ

牧野備前守

名は忠雅。越後長岡藩主。天保十四年近世日本國民史 人物概覽

松平伊賀守

年十一月所司代より老中に任じ勝手並海防掛りとなる。嘉永六年九月調階格に移る。【七四】
名は忠備。又忠固。弘化二年三月大阪城代となり、嘉永元年十月老中に移る。安政二年八月辭し、四年九月再任、外國掛りとなる。同五年六月免職せらる。【七四】

松平和泉守

名は乗全。弘化元年十二月大阪城代となり、二年三月西丸老中となる。嘉永元年十月本城の老中に移る。安政二年八月辭す。同五年六月再任、萬延元年五月病により免職せられ、帝鑑問仰付らる。【七三、七四】

松平越中守

松平定信に同じ。【二二、二四】

松平定信

松平定信時代以下各篇掲出。【九、二一、二二、二九、四五、四八、一〇五】

松平誠丸

松平齊典の第三男。天保七年正月江

戸溜池邸に生る。後元服して典則と名のる。嘉永三年三月父の後を嗣いで川越城主となる。先代より引續き江戸灣口防備警固の任に當り、嘉永六年十一月勳功により金一萬兩を賜はる。然れども眼疾あり癒えず、嘉永七年八月隱居して家を養子八郎磨に譲る。【一六】

松平齊彬 松平肥後守

島津齊彬に同じ。【九八】
名は容敬。會津藩主。保科正之八代の孫。六代容住の三男なり。幼字慶三郎。文政五年兄容衆の後を嗣ぎ封を襲ふ。侍從兼肥後守に任ず。八年九月將軍家齊の命を受け京都に朝す。ついで四位下左中將となる。弘化以來海邊事多くなるや、幕命を受け、彦根、川越、忍等諸藩主と共に江戸内海邊の警備に任ぜらる。又よ

松平容堂

松平慶永

く儉勤衆を率ゐる上に忠に下を恤み藩治見るべきもの多し。嘉永五年二月十日死。年五十。大正十三年二月從三位を贈らる。【一六、一七】
山内豊信に同じ。幕府分限接近時代揚出。【九六】
松平春嶽に同じ。幕府分限接近時代揚出。【八一、九六、九八】

水野越前守 水野忠邦

水野忠邦

水野忠邦に同じ。【六四】
文政天保時代、天保改革篇、幕府實力失墜時代揚出。【九、二三、三九、四四、四六、五七、六六、九七、九八、一〇五】

水野筑後守

名は忠徳、初字甲子次郎。天保十五年六月西丸奉行となり、弘化三年八月使番に移る。嘉永五年四月先手加役より浦賀奉行となる。六年四月長

水戸齊修

崎奉行に移る。安政元年十二月勘定奉行勝手方海防掛りとなる。四年四月長崎奉行を兼ね。同年十二月田安家老に轉ず。五年七月外國奉行となる。六年四月當分の内勘定奉行を勤め、神奈川奉行を兼ね。同年八月軍艦奉行となる。ついで十月西丸留守居に移る。文久元年五月外國奉行に再任す。二年七月箱館奉行となる。九月願により職を免す。明治維新後武藏多摩郡布田に退居せしが憂憤病を起して死す。【九六】
治紀の長子、幼字榮之丞、母は松永氏於五百の方。寛政九年三月江戸小石川邸に生る。十一年三月鶴千代と改め、立つて世子となる。文化七年五月元服して左衛門督齊修と稱す。時に年十四。八年十二月正四位下少將

水戸齊昭

に任ぜられ、十一年十二月從三位に叙し左近衛中將に遷る。十三年九月襲封、參議に拜せられ、文政八年十一月權中納言に進む。十二年十月四日死。年三十三。哀公と諡す。十一月三日瑞龍山に葬る。【四六、六〇、七三、七六、七八】
幕府分限接近時代、雄藩篇、天保改革篇、幕府實力失墜時代揚出。【四、二四、二八、三三、四六、四七、四八、五一、五三、五四、五五、五六、五七、五八、六〇、六一、六二、六四、六五、六六、六八、七〇、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、九六、九八】

水戸光圀

水戸慶篤

松平定信時代、雄藩篇、幕府實力失墜時代揚出。【四六、六二】
齊昭の長男、幼字鶴千代、字は子有、

南山と號す。母は文明夫人。文化元年五月立つて水戸家十代の主となる。一代の間藩中の黨争に禍せられ、種々の苦心あり。明治元年四月脚氣衝心にて死す。年三十七。十二月喪を發して順公と私諡す。【四六、五七、五九、六二、七一、七二、七三、七四、七六、七七、七八、七九、八〇】

三室戸雄光

陳光の子。文政三年十二月生る。【六】

村野傳之丞

吉井七太夫の次男。幼字は泰次。文化十三年七月生る。三歳にして村野喜平太の嗣となる。文政十一年九月十三歳にして齊興の小姓となる。天保二年正月奥小姓に移る。嘉永二年十二月寺社方取次に轉じ同日免役謹慎を命ぜられ、ついで三年三月徳島に流さる。安政元年八月赦され、二

明治天皇

孝明天皇第二皇子。母は權典侍中山慶子。大納言忠能の女。嘉永五年九月廿二日午半刻御降誕。祐宮と稱し奉る。萬延元年七月十日儲君となり、准后藤原夙子の實子となる。同年九月廿八日立親王御名陸仁。慶應三年正月九日踐祚。同四年正月十五日元服。同年八月廿七日即位。明治四年十一月十七日大嘗祭。四十五年七月三十日崩御。御壽六十一歳。大正元年八月廿七日明治天皇と追號し、同年九月十五日伏見桃山陵に葬り奉る。【一、一〇二、一〇三、一〇四】

【ヤ行】

谷田部運八

水戸藩士。後藤七郎と改む。結城寅壽に因縁して祐筆頭取となる。嘉永五年免ぜらる。六年結城等と謀りて密書を慶篤に呈し結城黨失權の回復を圖る。ついで江戸に出で高松藩君臣によりて素志を達せんとし、安政元年二年の頃しきりに畫策するところあり、然れども遂に行はれず、後高松に奔る。【六一】

横山忠兵衛

水戸藩臣。天保十三年結城寅壽に薦められ小姓頭となる。【六一】
名は泰通、文政九年正月生る。薩摩の人。七太夫の子、出で、分家を嗣ぎ、兄七郎右衛門、村野傳之丞等に從ひ志士と交る。嘉永三年三月四日黨争の事により自裁を命ぜられ、貨財を沒收し家名斷絶す。時に年廿五。後文久二年復興を許さる。【八三、八四、八五】

梁川星巖

文政天保時代掲出。【九九】

矢部定謙

文政天保時代、天保改革黨、幕府實力失墜時代掲出。【六六】

山内豊信

睿堂に同じ。幕府分解接近時代掲出。【九六】

結城寅壽

天保改革黨掲出。【六一、六二、六四、六五】

吉井七郎右衛門

名は泰論。七之丞の兄なり。七太夫の長子。文化十年十月鹿兒島清水馬場に生る。幼字新七郎、後に七郎と改む。文政七年八月十二歳にして齊興の小姓を命ぜらる。十年十月奥小姓役となる。天保元年江戸在勤中齊彬公に轉役す。十二年屋久島奉行

吉利 仲

に轉ず。嘉永三年職を免じて邸内に幽壁せしめらる。ついで大島に流さる。安政元年八月赦され、翌二年六月鹿兒島に歸る。五年五月家に歿す。年四十六。【八三】

吉成又右衛門

名は信貞、慎亭と號す。水戸藩世臣なり。早く藤田一正に學び、經世實用の材に長ず。後進物番より移りて郡奉行に任ぜられ民政に關與すること十五年、最も治績あり。藩主齊昭稟議を得るの時共に罪せられ、國許藩邸に謹慎せしが密に脱して江戸に出で雪冤運動に奔走し再び罪を獲て、弘化三年正月同志八人と城西官舎に幽せらる。嘉永三年免されて國

吉野英臣

政に參與せしが、同四年九月病んで死す。年五十四。【六四】

【ラ行】

頼 杏坪

名は惟柔、字は千棋、杏坪また春草と號す。通稱は萬四郎、又十郎惟清の第四子。幼時伯兄春水に従ひ大阪に寓し、片山北海に學ぶ。後また春水に従ひ、淺野氏の江戸藩邸に移る。稍長じて儒員に擧げらる。寛政九年春水に代り世子淺野齊賢に侍讀す。齊賢封を襲ふに及び擧げられて納戸

頼 山陽
林子平

奉行となり、文化八年郡宰の事を攝す。ついで三次專蘇二郡の宰に轉じ、采地百二十石を食む。後奴可三上の二郡を兼務せしめられ治績大に擧る。然れども有司と意見を異にする事あり、罷めて三次の市尹となる。天保元年致仕して廣島に歸臥し風月を樂しむ。五年七月廿二日病んで死す。年七十九。明治四十二年從四位を贈る。【二三】

【ワ行】

脇坂安宅

播磨龍野藩主。安治九代の後胤。安董の子。天保十年襲封。淡路守と稱す。近世日本國民史 人物概覽

渡邊 崑山

す。十四年奏者番となり。弘化二年寺社奉行を兼ね。嘉永四年京都所司代となる。侍從に任じ從四位下に進む。安政四年老中となり中務大輔と稱す。外國事務を管掌す。文久二年老を告げて致仕し、家を子安斐に譲る。同年五月再老中に任ぜられ、勝手並外國掛となる。後病の爲再三辭して免さる。かねて勤王の志厚く、安政の初め京都にあり禁裏の炎上にあひ率先乘輿を奉じて避難す、ついで皇居造營に功あり。明治七年一月死。年六十六。【一〇一】

渡邊 登

文政天保時代、天保改革黨、幕府實力失墜時代掲出。【二八】

索引

【ア行】

ア

秋谷村	六
亞細亞洲	一五
吾妻村	八一
安房	一〇三
安房崎臺場	六
近江	一八
天城山	二二
天面村	七
アメリカ	四九
荒川	八
荒崎	六
荒洲	三

アルギールス	六
安中	三六

イ、井

壹岐	一三
イギリス	一五九、一〇
英吉利	一〇
伊幾利斯	一三
暎咭喇國	一六
石取ヶ崎	七
石の巻	一七
板ヶ崎	七
伊豆	一〇一、一〇六、一一八、一三〇、一三三
伊豆浦	一一
伊豆沖	一五四
伊豆七島	一三
伊豆國	八九、九一、九四
稻取村	七七

大坊ヶ崎 七〇
 不入斗村 七〇
 亥之出崎 七二
 伊瀨 一一一
 印度 一四七
 印旛沼 二一五、三二、四九六

ウ

宇久須 一三一
 鷓島 九〇
 卯之出崎 七三
 浦賀 一六、三三、三六、五七、六〇、一〇〇、一〇一、一三三、
 一九四、二二三、三三七、三八、三三〇、三三四、三六八、
 四七、四九三、五〇、六五、六七、四、五
 浦賀港 六八
 浦賀湊 六八、四、五
 浦賀灣 五
 浦之郷 九
 運天港 一六

エ、ア

英國 一四三
 叡山 一〇
 蝦夷 一〇一、三三
 蝦夷地 三三、三六
 江戸 九、一〇、一一、一二、一五、三〇、三三、四一、
 一五、一六、一七、一七、二五、二七、三〇、三三、三九、
 三一、三八、三九、四七、四九、四七
 江戸内海 五八、六九
 江戸海 六九
 江戸表 七一、五二、一五、一六
 江戸近海 五
 江戸灣 九、六、九五、一〇〇、一〇一、一一一、一一

オ、ヲ

小笠原諸島 一〇
 隠岐 三三
 沖縄縣 四

奥伊豆 一〇
 奥の郷字野 一〇
 小田原 六五、九〇、三六〇
 小田原海岸 夫
 大磯海岸 夫
 大浦田 夫
 大井村 七〇
 大井川 一〇〇
 大阪 一〇一、七二、二二五
 大島 五八、五九
 大島 九、一〇、一七、一四、二二、三六、三
 大塚 七
 大鶴崎 七
 大坪村 八
 大原山 一三
 大森 七〇、八四、三三
 大水堀 九
 大灣戸 三

阿蘭陀 一四〇

【カ行】

カ

上野 一八一
 柿崎 八八
 柿崎村 八七
 鹿兒島 三八八、四七
 柏久保 一一一
 上總 一〇〇、一〇一
 勝山 七
 神奈川 一〇一
 神奈川沖 六
 神奈川宿 七
 神奈川臺 二
 金谷村 九
 河内 一八一

川名村 七
 甲斐 一八一
 貝渚村 七
 甲比丹 一六一
 甲府 一六
 龜ヶ崎 七四、八
 賀茂郡梨木村 三二
 鴨居村 七
 葛沙都加 一五
 葛摸沙都加 一〇三
 カラフト島 三三
 カンサツカ 三三、三四
 蒲原 三三
 キ

木更津 八〇、八一
 喜望峰 一五
 君澤郡河内村 三三

京都 一八、一九、四〇、四七、四七、八
 行徳 八
 ケ

久津間 八
 久里濱 七
 久里濱村 五
 黒塚 九、一〇
 観音崎 四七、五七、六八、六九、七二、七四、八三、一五
 観音崎臺場 七三、八
 ケ

京師 四三
 檢見川 八
 コ

小石川邸 三六、三六、三六、三七、三七
 五井村 八

小令原 一〇一、一〇三、一〇六、一〇六
 腰越村 七
 小坪村 六
 駒籠 二九、三〇、三〇
 駒籠邸 二六、二八、三三
 小水塚 九

【サ行】

サ

相州浦 一六
 相州灘 五八
 相模 一〇三
 薩摩 一四
 佐波 三
 寒川 七、八
 猿島 四八、六、七、八、八

シ

修學院 一〇
 シコタン 一五
 品川 一〇〇、一〇〇
 品川沖 六八、八
 品川御殿山 七
 品川宿 八
 信濃 一八
 十石崎 七
 下田 五九、七〇、八九、九〇、九一、一〇〇、一〇一、一〇三、一一一、一三七、一三二
 下田表 五八、八
 下田湊 六五、八八、九〇、九一、一〇〇、一〇七
 下野 一八一
 下總 一〇〇
 下の關 一七〇、一七
 城ヶ島 四八、五八、六八、六九、七六、八
 瓜哇 三
 暹羅 三五、二六
 シヤガタラ 一〇

白濱村 七

ヌ

水府 三七八

須崎 八七、八八、二二

鈴木新田 七、八、四

洲之崎 八六、八六、七、七六、八三

セ

仙臺 一七〇

千駄崎臺場 六

千住 三六〇

【夕行】

タ

太夫崎 七

犬房崎臺場 七

高松 二八

竹ヶ岡 六五、七、四、八

竹ヶ岡臺場 七

多田羅村 七

多摩川 八一、二九

達磨 二二

丹波 二八

チ

千島 一五

千代崎 五、七

千代崎臺場 七

千代田城 三三

占城 三三、三六

ツ

津輕 二九

豆州 一〇〇、一〇

ナ

長井村 六

中川 八

那賀郡 三三

那賀湊 三三

仲町 二九

長崎 三〇、三三、三三、三三

長崎表 一四、一六

長崎高鈴島 一七

長澤村 七

梨木町 四七

夏島 七、九、八一

那覇沖 一六

那覇市 四三

那覇港 一六

奈良輪村 八一

南部 二六

對馬 三三、三六

土浦 二九五

鶴崎 五

劍崎 六

鶴見川 七

テ

銚子 二四

テネマルカ 一七

ト

東西宇喜田村 八一

徳丸原 一三

鳥羽 一七

葛の巢 七、七、四

鳥ヶ崎 七、七、四、八

【ナ行】

ニ

仁右衛門島……………七
西浦……………六
日光……………六
日光山……………三
新潟……………三
葦山……………一六、一〇九、一一三、一三〇、一三四、一六六
沼津……………一〇〇
又……………
ネ……………
ノ……………
飛騨……………一八一
常陸……………一四三
平根山……………一四、一四六、一四八

【八行】

房州……………一〇〇
箱根……………一〇〇、一〇一、一〇三
箱根山……………一一
走水村……………七
旗山……………七
八丈……………三三
八公山東浦……………三三
八王子……………五五、五六、一三〇
八王子山……………七、七二、七三
羽田……………六、七二、八〇、三三八
羽田之出洲……………六八
濱御殿……………三三八
濱波太村……………七
畔洲……………八〇

ヒ

飛騨……………一八一
常陸……………一四三
平根山……………一四、一四六、一四八

フ

深川……………五
吹上御苑……………三六三
富士川……………三三
富津……………七、六九、七二、七四、七八、八〇、八二、八三
富津臺場……………七、七三
富津之隱洲……………六六
富津村出洲……………七六、七
富戸村……………七
府中……………二六
船橋……………八一
佛朗機……………三六

ハ

ホ

米國……………一四
堀江……………八一
淨泥……………三三
本所……………八
本牧……………六
本牧の荒洲……………六
本牧の出崎……………六

【マ行】

マ

澳門……………三三
阿媽港……………一四一、一四二、一四三、一四五
松ヶ島……………八一

松戸宿 三六八、三六〇
 松前 一六六、二〇三、二二一、二六三
 松輪村 七
 眞鶴岬 七
 滿刺加 一三六
 丸子 九

三

三河島 五
 三島 一〇
 三島宿 五五
 水戸 二二、二七、二八、二八九、九一、二九、二九四、三三七
 美濃 三四九、三五、三六四、三六六、三八〇、三八一、三九〇
 美作 一八一

メ

目黒 三六三

モ

守山 二六九
 唐山 一四四、七五
 唐土 一五九

【ヤ行】

ヤ

八幡村 八
 八幡の郷江川 一〇六
 山城 一八
 大和 一八一
 山邊郡 六
 歌羅巴 二九
 吉田村 一八八
 吉原 一三三、三一

【ラ行】

ラッコ島 三三、三四

リ

琉球 一三三、一〇一、一三一、四三、四七、四八、四九
 琉球圖 一六、四四六

ル

呂宋 二六

レ

靈岸島前 八

ロ

露國 一五
 魯西亞 三四、一四八、一五九、一七五、一九六、二〇五、二二五
 ロシヤ 二〇五

【ワ行】

ワ

脇の塚 七
 和州 一〇九
 和田村 七

昭和四年一月十五日印刷
昭和四年一月廿四日發行

不許
複製

近世日本
國民史

彼理來航以前の形勢
第三十卷 並製奥附

定價 金貳圓五拾錢

著者 德富猪一郎

發行者兼印刷者 渡邊爲藏

印刷所 東京市京橋區日吉町 友社

發行所 東京市京橋區日吉町 友社

振替口座東京一三〇〇

民友社出版圖書目錄

東京市京橋區日吉町
振替東京一三一〇〇

著郎一猪富德 峰蘇

史民國本日世近

二一の領本色特

◆歴史講究熱勃興

◆獨闢創造の歴史

◆胸中の一大樓閣

◆特色は綜合大觀

◆時代潮流の活描

◆秩序的百科字彙

◆胸中の一大樓閣
著者は胸中に一大樓閣ありて、其の資料に古人を使用する迄で、この偉大なる國民史は、著者の匠心獨造である。而してこの大建築は、實に大正昭和の御代を象徴す可き一大偉觀であるのみならず、帝國文獻の有する曠古の一大産物である。

◆特色は綜合大觀
一室には一室の用があり、一階には一階の用がある。然も其の特色は、之を綜合大觀せればならぬ。蘇峰先生の國民史、亦如此耳。併し國民史を以て、單に世の所謂歴史と同一視するは、大なる間違だ。歴史は歴史だが、從來の歴史とは、全く其の本領、面目、趣向を異にしてゐる。

◆時代潮流の活描
それは著者は一方に人を見、一方に勢を見。一方に心を見。而して兩者が社會を經緯して、時代の潮流に從て動く情態を描き且つ叙し、且つ論ずるからである。これ從來の史書に見る能はざる特徴の一だ。

◆秩序的百科字彙
されば國民史は、近世日本のあらゆる寶庫だ。政治でも、經濟でも、文學でも、宗教でも、美術でも、哲學でも、風俗でも、商業でも、工業でも、農業でも、世の中の森羅萬象、殆ど悉く其の大綱大要を囊括して漏らす所がない。されば國民史を以て、秩序的の近世日本百科字彙と云ふも妨げまい。

史民國本日世近

(1) 織田氏時代 篇前	(2) 織田氏時代 篇中	(3) 織田氏時代 篇後	(4) 豊臣氏時代 篇甲	(5) 豊臣氏時代 篇乙	(6) 豊臣氏時代 篇丙	(7) 豊臣氏時代 篇丁
本篇は近世日本國民史の最源頭をなすもので、筆を室町幕府の末期に起し、其の衰亡に止む。眞に信長の霸業創始時代の記録也。	本篇は信長が、銳意努力の時代を叙述したるもので、長篠戰爭を始め、安土城の經營、毛利氏との關係、丹波方面の手入れ等に至る。	本篇は信長が最活動最得意の時代を叙述したもので、武田氏の滅亡、信長父子の死等を描き、最後に信長の全體を顯現したるもの。	本篇は秀吉の素生出身に筆を起し、後織田氏時代に接續して、秀吉の創業時代を叙述したもので、一代の英雄秀吉の立志傳なり。	本篇は秀吉が五十一歳から、五十三歳に至る最も油の乗りたる期間の記録で、秀吉の生涯中最得意の時代である。	本篇は秀吉時代の落著を示し、北條氏退治を骨子として、東北の平定、家康の移封の他に、我使節の羅馬入りに及ぶ。	本篇は著者が最も精力を傾注し、大和民族の海外葛藤より、秀吉の外征、行長の平壤入り、其他日本軍制海權の失墜に終る。

製上 菊判 定價 各五圓
製並 菊判 定價 各三圓
送料 各十錢
送料 各二十錢

近世日本國史

(8) 豊臣氏 時代戊篇 朝鮮役 卷中	(9) 豊臣氏 時代己篇 朝鮮役 卷下	(10) 豊臣氏 時代庚篇 桃山時代概観	(11) 家康時代 上卷 關原役	(12) 家康時代 中卷 大阪役	(13) 家康時代 下卷 家康時代概観	(14) 徳川幕府 上期上卷 鎖國篇
------------------------------	------------------------------	----------------------------	------------------------	------------------------	---------------------------	--------------------------

本篇は朝鮮役に於ける日明外交史にして、朝鮮が明の救援を請ふに始まり、明の神宗皇帝が秀吉を日本國王に封ずるに終る。

本篇は朝鮮役の總勘定にして、講和評定の経緯より秀吉の死と日本軍の總撤退に至り、關白秀次の破滅秀頼の成立を叙す。

本篇は日本歴史に磨滅すべからざる華麗絢爛たる文化の一時期を劃した、桃山時代の多趣多様、各種各方面に互る特色、概観を描く。

本篇は秀吉死後の形勢より、關原一戦に於て石田三成が家康と雄雌を決せんとして、如何に震天動地の活劇を演じたかを叙す。

本篇は天下の名實徳川氏に歸し、遂に大阪冬陣夏陣の開始となり大阪城陥り豊臣氏全く亡ぶるの狀を叙したる哀史なり。

本篇は家康の人物と、其の一生の事功とを精審に叙述したもので、徳川幕府施政の根本義に始り、家康の臨終に至るまでを記述す。

本篇は鎖國政策に關聯した内外一切の出來事を、豊富なる材料と精緻なる史筆とに因りて叙述したもので、島原役の顛末等をも記述す。

上製 菊判 定價 各五圓 送料 各十錢
並製 菊判 定價 各三圓 送料 各二十錢

近世日本國史

(15) 徳川幕府 上期中卷 統制篇	(16) 徳川幕府 上期下卷 思想篇	(17) 元祿時代 上卷 政治篇	(18) 元祿時代 中卷 義士篇	(19) 元祿時代 下卷 世相篇	(20) 元祿享保中間時代	(21) 吉宗時代
--------------------------	--------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	---------------	-----------

本篇は、幕府對朝廷關係の記述で、朝幕衝突を始め、諸大名改易、親藩連枝處置の顛末の如き、最も幕府の醜惡を抉出す。

本篇は尊王及び國體の思想の胚胎と、發達の來歴を記述し、殊に水戸光圀に關しては特筆大書し、由比正雪事件に及ぶ。

本篇は幕府の政治を記述すると共に、綱吉公、桂昌院、堀田、柳澤等の人物を批判し、時の後光明天皇の御事をも記載す。

本篇は赤穂義舉事件の記述で、單に興味中心を目的とせず、其の原因を究め、世論を批判し獨特の觀察の下に成る眞の義士觀なり。

本篇は元祿時代各方面の代表的人物と、業績を記し、瑞賢、奈良茂、辰五郎等の實業家や、西鶴、近松、芭蕉、狩野、英、等を擧ぐ。

本篇は家宣、家繼時代に、新井白石が如何に活躍したかを精叙し、羅馬人シドッチの渡來、江島事件等の特筆して概観に及ぶ。

本篇は將軍政治中興の一時期たる吉宗時代の施設萬般を縱横に叙述し、吉宗の人物は勿論、更に文教發達の方面をも特筆した。

(上製) 價五、〇〇
(並製) 價二、一〇
送 送 二〇八〇

上製 菊判 定價 各五圓 送料 各十錢
並製 菊判 定價 各三圓 送料 各二十錢

近世日本國民史

- (22) 寶曆明和篇
- (23) 田沼時代
- (24) 松平定信時代
- (25) 幕府分解接近時代
- (26) 雄藩篇
- (27) 文政天保時代
- (28) 天保改革篇

本篇は桃園天皇を中心としたる、攝家對平ら公家の葛藤、竹内式部、山縣大貳の二大事件を詳述し、幕府倒壊の因を説く。

本篇は田沼時代に向つて厳正なる批判を下し、田沼意次の人物を詳細に解剖し、蘭學興隆を物語り、上杉鷹山の劇的場面を及ぶ。

本篇は時の老中松平定信を中心として當時の諸相を評述批判し、就中光格天皇の尊號宣下事件を解剖論評した點本書特獨。

本書は徳川十一代將軍家齊時代、幕府の崩壊する勢を擧げ、外國船の接近に國防論草王攘夷論の湧出を述べる。

本書は徳川末期に於ける諸藩の形勢を論じ、殊に薩摩、長州、水戸の三大雄藩を論評す、蓋し此の三雄藩は維新に最も活躍せるもの。

本書は徳川幕府の礎を搦がす第一偉たる大鹽平八郎事件を詳述し、その徹底的研究を遂げ、當時愈々肉迫し來れる外船の情勢と錢屋五兵衛その他當時の密貿易者に及ぶ。

本書は水野忠邦の斷行せる天保改革を詳述論評して、水戸藩對幕府の確執に及び、當時の對外事情より、高野長英の疑獄及び高島秋帆、江川太郎左衛門を説く。

製上 菊判 定價 各五圓
製並 菊判 定價 各四圓
送料 各十錢
送料 各十五錢

近世日本國民史

- (29) 幕府實力失墜時代
- (30) 彼理來航以前の形勢

近刊

本書は轉封事件より中央政府のいよいよ衰へ來りしを説き、阿部正弘の立身より天保改革の後始末に及び、英米露の益々肉迫し來りて正に鎖國主義の最後近づきたるを論ず。

製上 定價 各五圓
送料 各十錢
製並 定價 各四圓
送料 各十五錢

蘇峰叢書

- 第一冊 皇室と遊國
- 第二冊 名山と政治
- 第三冊 國好齋感興
- 第四冊 書齋感興
- 第五冊 齋感興

第六冊 人物偶
第七冊 關人志
第八冊 探勝錄

以上八冊既刊。以下毎月一冊宛續刊の豫定

二月十一日は日本帝國建立の日だ、此の日出度き日に、本叢書は發刊された。蓋し本叢書は蘇峰學人の最近十數年に於ける文筆生活を代表する金字塔である。その種目は、天竺、政治、文學、宗教、美術、風俗、その他凡そ人間生活に關するもの總てに亘つてある。本叢書は正に大正、昭和の日本を表象する活時代史である。

孝明天皇御繪旨(武通)頭頭に
明治天皇御宸筆(御製)敬揚に
蘇峰 徳富猪一郎著

新刊
維新回天の偉業に於ける水戸の功績

蘇峰先生水戸の爲めに義憤を發し此の快著が出版した。本年の時勢を論明し、史眼炬の如く光輝燦然たる維新の偉業を論む。就中井伊直弼に對する是非に對して百年の定論を與ふ。

定價 四六判 壹圓
送料 六錢

民友社編 轉部編纂		蘇峰 德富猪一 著郎					
		國民小訓字解	家庭小訓字解	處世小訓字解	中庸の道	昭和一新論	處世小訓
何れも出来るだけ精確丁寧に字解を附し、著者述作の精神の諒解に努む。		本書は「國民小訓」の姉妹篇として昭和御代字内の趨勢を洞察しての立言なり。	著者時事に深愷し、滿腔の忠憤禁ぜず、嚴正に此書成る。國民の向ふ所を示し、各大臣の極力推賞する所、好個の青年訓練教科書也。	本書は「國民小訓」の姉妹篇として昭和御代字内の趨勢を洞察しての立言なり。	如何にして世に處すべきかを平易に説いたもので、實に出世の好指針。	改訂（文部省認定） 家庭に於ける實用的心得を示したもので家庭や女學校に備ふべき書。	改訂（文部省認定） 「國民小訓」愛讀者諸氏の熱誠なる御要求に應じ、携帯に便にして而かも蕭洒なる縮刷版。
送料	定價	送料	定價	送料	定價	送料	定價
二錢	拾五錢	二錢	拾五錢	二錢	拾五錢	二錢	拾五錢

愛山路 山著	財國法人 青山會館編纂			蘇峰 德富猪一 著郎	
	乃木大將	水戸流芳遺墨	甲東先生遺墨集	南洲先生遺墨集	大久保甲東先生
近代軍神と云はれる乃木將軍の言行は眞に儒夫を起たしめる。本書は將軍の生涯を愛山先生が表現した感激の文字である。	水戸義公（黃門光閣卿）生誕三百年記念として、集められたるものにして維新回天偉業の先驅をなしたる水戸の志士の遺墨集である。	本集は南洲先生遺墨集と共に日月の如く並び懸けて青史を照破し、四海忠義の心を振起するの一大寶訓なるを疑はず。	一卷を開けば天挺の大人豪の風手眼前に躍出し、無限の大教訓を享受し得べく現下風教興徳の源泉である。	本書は維新の偉傑甲東先生に對する世人の誤解を一掃し、先生の眞の力量、手腕、人物及びその事業とを評論す。	本書は維新俊傑中、現代に於ても最も一般民衆に欽慕さるゝ西郷南洲先生の人物とその事業とを論評せしものなり。
送料	定價	送料	定價	送料	定價
八錢	拾五錢	一圓	拾五錢	一圓	拾五錢

大谷光瑞師著

刊 無 題 錄	第一編、第二編、第三編	第一、第二編各價八拾錢 第三編 價八拾五錢 送(各)二錢
極樂莊嚴	新覺上人の胸中燦たる光明に満つ極樂の莊嚴を科學的に表現したるものは即ち本書である。	定價 六錢 送料 八錢
濯足堂漫筆	而一流の獨特の紀行感想隨筆等を收むる。と世有餘篇、何れも多彩豐潤、津々たる興味盡きせぬ新集を見よ。	定價 六錢 送料 十錢
孫子新註	孫子の本領は外交經世の眞髓を説くにある。是れを有して國家榮え、是れを讀みて國民昂る。蓋し人生の好指針である。	定價 六錢 送料 六錢
佛說阿彌陀經講話	西方淨土の本願は此の經典より流出す。本書は光瑞親下の詳釋本にして、その博學と懇切とは正に賢師慈父の感あり。	定價 六錢 送料 六錢
般若心經講話	光瑞師の多年の研究に依て成れる書。其の該博の蘊蓄を傾倒した後完成されたものだけに、渾然之を融一してある。	定價 七拾五錢 送料 四錢
佛教の原理	本書は師が博大なる科學的智識を傾倒し佛教の原理を解釋開明したもので、一讀以て其の深甚微妙の眞理に到達す。	定價 壹圓五拾錢 送料 六錢
第一義諦	本書は光瑞師の著書中に於て最も光彩陸離たるものにして、玄幽を極めたる佛教の眞諦を説く獅子吼なり。	定價 壹圓貳拾錢 送料 六錢
見眞大師	本書は大師の裔孫たる光瑞師が大師の信仰と人格とを詳述されたものにして、大師の面目躍如たるものがある。	定價 參和製 送料 十二錢

國民新聞社
國民新聞編輯局

普通選舉早わかり	普通選舉の内容を平易に、親切に説明したもので参考資料をも收めた類書中の霸王なり。	小形 參拾錢 送料 二錢
普選ポスターと新戰術	現代はポスターの時代なり。ポスターは直接簡明なる武器。本書は各國と我國各政黨のポスターと普選常識手引を備ふ。	定價 四拾錢 送料 四錢
地方普選早わかり	本書は府縣會議員普選の常識、及びそれと必極なる法文、收めしもの。普選ポスターと新戰術一の姉妹篇。	定價 參拾錢 送料 四錢
街頭經濟	本書は日常誰人でも見聞する物に就て平易に經濟的立場より詳述する。例へば「虫賣り」「花賣り」「プロカーガー」の如し。	定價 六拾錢 送料 四錢
歐洲の獨裁政治	本書は大戦後に於ける歐洲諸國が如何に獨裁政治に傾いてあるかを論述したるものなり。	定價 四拾錢 送料 四錢
我國の無產政黨	本書は近來我國に現はれ、殊に普選後ば興味の中心ともなるべき無產政黨の生立を述べしもの。近代人必讀の書なり。	定價 四拾錢 送料 四錢
地租委讓問題論戰	地租委讓問題は財政經濟上の問題たるのみならず、今や我國政治問題中にて重要なものなり。本書は朝野を代表する二氏の論戰なり。	定價 貳拾錢 送料 四錢
貴族院改革と現制度の運用	今や貴族院は益々民衆と離れ行く感あり。この時に當り甲冑の新人近衛文相の貴族院の叫びや、眞にわが意を得たものでなければならぬ。	定價 貳拾錢 送料 四錢
生活問題と經濟思想	本書は難かしい經濟學を斯くも平易に斯くも丁寧に述べたるもの。實に世人の生活を洞察せる博士の優しき指導書である。	定價 貳拾錢 送料 四錢

花 蘆
著郎次健富德

農學博士 小野武夫著	農學博士 中島九郎述	農學博士 フオート 博士原著 水野常吉譯	農學博士 フオート 博士述
版改 自然と人生	版改 小 不 如 歸	版改 小 思 出 の 記	版改 名 婦 鑑
萬人の胸に徹する魅力ある本書は、實に現 今に至るまで、其の需要は出版界の記録を 破る。精彩ある自然と人生のスケッチを見 よ。讀者の視聽を集めた本書は、津々浦々に まで知られた武男と、浪子を中心とした悲 愴な物語で、何人も一度は手にすべき不朽 の名篇。	著者の初期の傑作で、主人公の幼時よりの 運命の曲折と、生存の悩みと、戀愛の歡喜 と、結婚の幸福を描いた長編小説。	本書を一度讀めば、古今の名婦を一堂に 聚めて相語るの思ひがある。古の名婦の なつた現世の名婦の事業と人物を知れば 女性そのもの眞價を知ることである。	本書は各方面より見たる農村生活の改善等 を實際の何れを擧げて、極めて面白く平易に 論述したる近來の快著。
米國問題、小作争議、農村生活の改善等、其 他農村に於ける現代の政治、經濟、社會上 多くの問題を實際より研究した良書。	世界的唯一の模範たる丁抹の農村と教育と を説ける農村問題解決の鍵にして、國富増 進の典型を明示したる利川厚生の好指針。	斯界の世界的權威者たる博士が、先年來朝 のの際、我が農村問題の解決に一大刺戟を與 へられたる農村及び教育問題の講演集。	農村問題講演
送 料 價 六 拾 八 錢	送 料 價 六 拾 八 錢	送 料 價 六 拾 八 錢	送 料 價 六 拾 八 錢

育教民國
編會勵獎

文學博士 澤柳政太郎編	英國 原著 敏一譯述	下位春吉述	鶴友會編	胸澤裁縫學院長 坂井光子
版改 現代文化と教育	版改 修身科	版改 宗教教科	版改 現代教育の警鐘	版改 太平洋戦争
明治類題の句集で、題目の豊富、句数の多 饒なることを特色とせる斯界の良書。子規 居士の監修に高き識見を窺ふべし。	故野川博士、深川博士、阿部博士、大教授、菅 原博士、上野博士、澤柳博士、入澤博士、菅 大教授等の文化教育の講演集にして、入澤 の必讀書。	本會新設講座の第一回講演筆記である。理 論と實際の両方面から説いた修身科の研 究。教育者諸君補習用の絶好書。	神教、佛敎、基督教、儒敎即ち世界四大宗 教の眞髓を四大家が最も短簡的、而かも平易 に叙したるもの。今まで求めて得られざり し書。	本書は我城唯一の實際教育の研究學校たる 所の成城小學校の苦心經營と十ヶ年努力と を披瀝せしもの。天下教育改造の警鐘であ る。
送 料 價 八 拾 八 錢	送 料 價 八 拾 八 錢	送 料 價 八 拾 八 錢	送 料 價 八 拾 八 錢	送 料 價 八 拾 八 錢

家庭向 物尺いらす坂井式洋服裁縫

一讀すれば直ぐ小供
も出来る重寶な書

送 料 價 八 拾 八 錢

民友社小史と 出版の圖書

民友社は明治二十年二月、蘇峰徳富猪一郎氏の創立する所だ。爾來こゝに四十年、明治大正を通じて、此の如き永き生命と、しかも恒に生々不息の精神を以て、國家の進運に貢献しつゝある當業者は、他に其匹を見ない。

「國民之友」の刊行が、明治文化の促成に寄與したことは言を須たず、「家庭雜誌」を刊行して、婦人醒覺の先唱者となり、「英文極東」を刊行して、日本を世界に紹介したのも、當年の一大驚異であつた。其の出版した圖書は、蘇峰學人等身の著作を中心とし、更に政治、文學、教育、經濟等の各方面の名著を網羅し、其の種類千餘種、刊行部數は無慮千萬部にちかく、其の世教に裨益し、人文を開發したるの功績は、天下公論の存する所である。

特に大正時代に入つてからは、蘇峰學人の文章報國の一念は、愈々益々熱烈となり、幾多の名著を打出したが、就中「近世日本國民史」は、畢生の大事業として經始せられ、大正七年五月から今日迄に、三十卷を稿了し、豫定以上確實に進捗しつゝある。

6

384

43

終